

少しばかり勉強ができる子供だったというのは、以前お話しした通りです。ところが、小学校の卒業式でちよっとした「事件」が起きます。

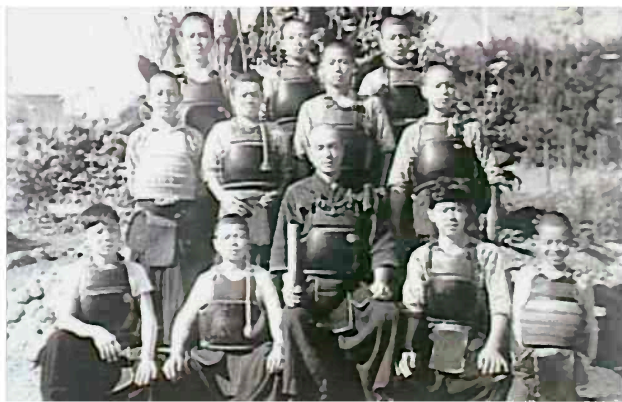
当時、成績上位の子が卒業生代表として答辞を読むことが多かったのです。私の成績が1番だったかどうかは定かではありませんが、上位だったのは確かです。なのに私はその役回りに選ばれません。一斉テストがあるわけではないし、おそらく先生たちが相談して決めていたのではないのでしょうか。私は担任の先生と少し折り合いが悪かったのを覚えています。

卒業式が終わって帰ると、答辞を読めなかったこととすぐに母に呼ばれ叱られました。「私はそんな子に育てた覚えはない」と。2時間くらい正座させられて、こんなことお説教をされました。私はというところ、答辞を読むことに特にこだ

～HISTORY～ 暮らしを変えた立役者

わりはありませんでした。母は負けず嫌いでしたし、私を跡継ぎの息子として立派に育てることが自分の役割だと思っていたのですから、ふがいないと落胆したのでしょうか。

必死になって叱る母の姿を見て、それだけ懸命に生きて私を育てようとしているのだというを感じました。それから母を悲しませるようなことはしないように、と思いました。勉強



中学でも剣道に励んだ（最後列左が本人）

変わっていきなればなり勝1敗でいかなければなりませんでした。私から、先鋒は隣の住んでます。幸いにも、先鋒として全部勝ちました。30勝ぐらいしたと思います。3年時は大将を務めました。

先ほどの英語の先生との出会いもあって、中3になり受験の時期を迎えると、自然に浦高に行きたいと思いました。当時、小川中では、成績の上から順番に熊谷、川越、松山高校に行くような感じでした。私は成績1位だったので、成績のいいグループの中には馬が合わない人がいて、熊谷高校を目指していました。それもあって、私は「とにかく埼玉で1番の高校に行こう」と決めました。

小川中では初めての浦高受験者だったので、周りには心配していました。生徒会長も務めていたこともあり、先生たちも「失敗したら大変だ」なんて思っていました。でも私は自信もありましたし、「余計な心配だ」と思っていました。結果は無事、合格でした。

人に負けないよう奮起

答辞読めず 母に叱られる

でもスポーツでも、仲間に負けないように頑張ろうと思いました。

小川中学校に進学してからは学校の成績は断トツに1番でした。もちろんテストの前にも勉強はしましたが、普段から予習復習をきちんとしていたからです。小川町は田舎でしたし、当

時は今と違って競争を意識することはほとんどない、おらかな時代でした。

学校の先生からは大きな刺激を受けました。数学の授業ではある先生からは「教科書はいいから、こっちやっっておけ」と、テキストを渡されたりしていました。英語の先生はひととき

の憧れもありました。その先生は県立浦和高校から東大に行っていました。先生は私に「私の後を継いで浦高から東大に行け」なんて言っていました。

運動の方はというと、中々でも剣道が続けていました。1、2年の団体戦では先鋒（せんぼう）を務めま